

■後花園天皇 室町時代末期の乱世に、傍流から即位。学問諸芸に通じることで天皇の権威を確立し、「中興の英主」になった。

ごはなぞのてんのう

応永の外寇・1419=

将軍足利義満による南北朝合一後、南朝、北朝が交代で天皇を出すようになっていたが、義満の死とともに、反故にされ、後小松は子の称光を天皇にして院政を敷いたため、南朝の子孫が反発しているなか、崇光天皇後、**皇統の正嫡を外され没落していた伏見宮家貞成の子に生まれ、若宮と呼ばれる。**

母二条局の兄庭田重有が傳役になり、彼の側室賀々に養育される。

・・・・・・1422= 3歳

父に連れられ石清水八幡宮に参詣、人生唯一の遠出となった。この年から、称光天皇が幾度か危篤状態に陥るようになる。天皇家の権威を上げたかった将軍義持にとって、もともと病弱で皇子が無かっただけでなく、問題多い後光厳皇統に見切りをつけていたらしく、後継候補の一人として、上皇に問い合わせている。

義持出家・1423= 4歳

将軍義持は、病弱だった義量の後継に退職。皇位継承は、現実策として、称光の同母弟だった小川宮が儲君になるも、称光天皇以上の問題児で、上皇自身は、若宮を気に入っていた。

将軍不在化・1425= 6歳

急死。将軍義量も死去して、結局、義持が再び政務を担当。**天皇家、将軍家ともに、有力な後継者を失う事態に至る。父貞成は、後円融院三十三回忌をチャンスと捉えて法会に貢献、その褒美で、後小松の猶子となり、親王宣下されるが、称光が事件を起こして、若宮が後継になる可能性が高まり、落飾し、入道親王になる。誕生の頃、父が、将軍義持の弟で天台座主義円に所望されて伏見御所の樹木を届けて喜ばれたが、**

義教籤引将軍1428= 9歳

**義持が後継を定めないうまま死去して、籤引きで選ばれたのが、その義円(義教)であった。僧であったため、着冠できず、将軍宣下が1年延期となるなか、称光天皇が危篤に陥り、両統迭立を要求する後南朝勢力から、義教によって保護され、称光天皇が崩御すると、崇光皇統を認めない上皇の思いを義教が了承、上皇猶子となり、親王宣下のないまま、踐祚。当時は寒冷期で飢饉が多く、この年の正長土一揆が始まり、**

播磨国一揆・1429=10歳

**\*各地で土一揆が起こるなか、即位。天皇の父となった貞成親王は「神慮」と喜ぶとともに、太政天皇号を要求するようになる。八親等以上離れた統柄での皇位継承は、道鏡の専横で天皇制の危機になり、宇佐八幡宮の神託の結果、光仁天皇が即位して以来658年ぶりで、以後この皇統が現在の皇室に連なっている。**

尚氏王統確立1430=11歳

**後小松上皇の院政が継続するなか、禁中の乱れを憂う将軍義教は、貞成を上皇扱いし、以後一貫して、花園天皇によって皇室の権威を高めることに専念、**

・・・・・・1431=12歳

それに応じて、貞成は伏見宮家に秘蔵の後深草院宸筆法華経を長講堂に奉納し、

明貿易回復・1432=13歳

詩歌管弦に堪能で、鬮書・猿楽・松はやしなどを好み、また学問にも秀で、**それに応じて、伏見宮家に伝わる崇光皇統の蔵書を借り出して読むなど、その向上心は強く、**

・・・・・・1433=14歳

**元服し、彦仁の諱が定められる。天皇権威向上を図る将軍義教の執奏により、「新統古今和歌集」の撰進に着手、自作を送って添削を受けるほどに実父のようであった上皇が崩御、その遺詔をふまえて親政を始めるが、その学問始めで、侍講を務めた清原業忠は、言葉にできないほど利発であると驚いている。父貞成からは、かつて花園天皇が甥の皇太子量仁に贈った辛口の訓戒「誠太子書」が進上され、**

世阿弥配流・1434=15歳

**続いて、父自らが崇光天皇から後花園天皇即位に至る歴史をまとめた「正統廃興記」を改題した「椿葉記」を贈られる。義教による、熱田領の返還や蛙・干物公事の進上で、経済的に安泰になっただけでなく、実母南御方(二条局)が従三位に叙せられるなど、肩入れは尋常でなく、**

・・・・・・1435=16歳

**三宝院満済が死去して、抑える者のなくなった義教の専制が本格化、父に仙洞御所を献上させられるが、自らは、後小松の遺詔を守って、父に太上天皇号を贈らないばかりか、崇光皇統に伝わる琵琶でなく、後光厳皇統の楽器の笙始が行われ、以後、習得に精を出す。**

・・・・・・1437=18歳

**\*将軍義教が、それまで取り仕切ってきた朝務(朝廷の政務)を天皇に返還すると宣言、それに応え、義教の室町第に行幸・滞在し、最も信頼する臣が室町殿であることを天下に示し、**

永享の乱始・1438=19歳

**さらに、義教が、天皇を戦争に関与させようとしたのに応え、永享の乱が起こると、治罰論旨を発給、足利義満の代より廃絶していた朝敵制度を60年ぶりに復活させる。**

永享の乱終・1439=20歳

最後の勅撰和歌集になった「新統古今和歌集」が成立(12首入集)。

結城合戦・1440=21歳

いわば“中央図書館”の設立を構想して、全ての廷臣に家に所蔵する蔵書のリストを提出させ、のち、それらを書写させ、興福寺や園城寺にも同様の命令を出している。美術も愛好し、鑑識眼もあつたようで、興福寺所蔵の絵巻「玄奘三蔵絵」の、前半六巻と後半六巻の絵師が異なることまで指摘している。

嘉吉の乱・1441=22歳

**将軍義教が暗殺された嘉吉の乱が起こると、まさに将軍の代行者として、赤松満祐治罰論旨(朝敵討伐命令)を発給、ほぼ同時に、幕府側が要求全てを認める画期的な徳政一揆が起きるなど、幕府の力が弱体化、以後、幕府は大小の反乱鎮圧に際して論旨を奏請、天皇の権威は一気に上昇、**

対馬嘉吉条約1443=24歳

**義教を継いだ長男義勝が赤痢で急死して、将軍が空位となるなか、後南朝勢力の夜襲で、土御門内裏が放火されたため、左大臣近衛房嗣郎に逃れ、三種の神器の一部を奪われる事態になったが、敵勢力に対しては、治罰論旨により圧倒的勝利を収め(禁闕の変)、朝廷の権威は最高潮に達したことから、**

・・・・・・1444=25歳

同母弟の貞常王に親王宣下を行い、

・・・・・・1446=27歳

**父の貞成親王に太上天皇の尊号を奉るに至るが、なお、崇光皇統復活を望む伏見宮家の意向は拒絶。**

成氏鎌倉公方1447=28歳

常磐井宮家の恒弘を猶子にし、親王宣下。**義教の三男三春が元服して、将軍義政になるが、なお幼少であったため、政務を畠山持国と日野重子が総覧、山名宗全と細川勝元が抵抗して、世情は不安定化。**

・・・・・・1452=33歳

翌年にかけて、現在のバスマツにある海底火山が大爆発、以後、全球的に寒冷化、飢饉続きになる。

・・・・・・1453=34歳

木寺宮家静覚を猶子にし、親王宣下。

古河公方始・1455=36歳

後二条天皇の5世孫にあたる静覚の父木寺宮邦康王を貞成の猶子にする。

・・・・・・1456=37歳

**父貞成が死去(後崇光院と追号される)、弟貞常に伏見宮家の継承と、永世にわたる存続を約束、当主は代々天皇の猶子となって親王宣下を受けることで、後光厳皇統との両立が完成。**

道灌江戸城始1457=38歳

**嘉吉の乱で没落した赤松氏の遺臣らが後南朝の行宮を襲って神璽を奪還し(長祿の変)、**

・・・・・・1458=39歳

**朝廷へ返還。ここに全ての神器が天皇の手中に帰して、大きな悩みも解決するが、その褒美で復興した赤松家は、また新たな火種になって行く。**

蓮如御文始・1461=42歳

将軍足利義政が、長祿以来の飢饉の最中に御所改築をしているのに対し、漢詩を以って諷諫したという逸話は著名であるが、義政自身は、その後も平然と工事を続ける一方、迅速な飢饉対策もしているの、あくまでも、天皇を賞揚するためのものであったといえよう。龜山天皇の5世孫にあたる常盤井宮全明王に親王宣下して、天皇家を圍繞する宮家の体制を固めた後、

寛正大飢饉終1462=43歳

**\*ただ一人の皇子の成仁親王に天皇としての心得を説いた「後花園院御消息」を与え、**

・・・・・・1464=45歳

**成仁親王(後土御門天皇)へ譲位して上皇となり、左大臣(将軍)足利義政を院執事として院政を敷いた。在位は36年近くで推古天皇を上回り、当時は、神武天皇以来の在位年数がそのまま受け入れていたため意識されなかったが、実際は、それまでの最長記録であった。子の後土御門天皇の在位年数がその次の長さであるが、のち、光格天皇、明治天皇、昭和天皇と、記録は伸びて行く。以後、猿楽、蹴鞠という共通の趣味で気の合った義政夫妻と親交するが、義政政権は迷走、**

・・・・・・1466=47歳

**廷臣としての儀式を遂行する力はあった義政の尽力で、後土御門天皇の大嘗会が遂行されたが、**

応仁の乱始・1467=48歳

**応仁の乱が勃発(大嘗会も以後200年途絶えてしまう)、東軍細川勝元から西軍治罰の論旨の発給を要請された、これを拒否。全てから逃げるべく、故郷伏見への隠遁を願うも、おそらく弟貞常に奮起を促され、東軍側になったことで乱を収めることのできない将軍義政に代わって、両軍に内陸要請するも、危険なため、天皇とともに室町第へ移されると、突然出家。その後、相国寺合戦が起きると、興福寺に忠節を尽くすよう院宣を下すが、細川勝元により山名宗全治罰に利用され、朝廷の崩壊が深刻になって行くなか、西軍が将軍に擬した義視に対する治罰院宣を出す一方、作品を遺したかったのか、独吟百韻。**

・・・・・・1470=51歳

**\*興福寺に対して後南朝討伐を命じ、自らの責任で始まった戦乱を終わらせようと執念を燃やし続けたが、中風のため室町第で崩御した。同じ室町第にいた足利義政・日野富子夫妻がその最期を看取り、義政は戦乱中の外出に反対する細川勝元の反対を押し切って、葬儀から四十九日の法要まで全てに参列している。後に成立した「新撰菟玖波集」に11句が入集している。歌集「後花園院御製」、日記に「後花園院御記」。**